

# 記憶の再構築

——“Now I Lay Me”を読む——

奥村直史

“Now I Lay Me” (1927) はヘミングウェイの諸短編のなかでも読みにくい作品である。ひとつには、過去の時点における回想を現在からまた回想するという語りの手法が読みにくさの要因となる。それに加え、過去の回想において遡ったさらに過去の出来事を、現在の時点からも直接回想するという複雑さだ。まずは全体の枠組みを確認することにする。

語り手はニック・アダムズで、第一次世界大戦からある程度時間が過ぎた時点からイタリアの戦地にいたころの夜を回想する。戦後どのくらいの年月が経過しているかは明らかにされていない。戦地では前線から7キロ後方の養蚕室で眠らないまま夜明けを待っている。不眠症ではない。夜、砲弾によって吹き飛ばされ、魂が肉体を離れる体験をしてからは、また魂が抜け出るのではないかという恐怖にとりつかれ、暗闇のなかでは眠らないことにしている。夜明けを待つまでのあいだ、ニックは頭のなかで鱒釣りを思い描き時間をやり過ごす。幼少のころ実際に行った川での釣りもあれば、想像によりつくりあげた架空の川もある。釣りが思い描けない夜は、過去に出会った人々に祈りを捧げて朝を待つ。祈りの文句が思い出せない夜には、動物の名、魚の名、国名、通りの名などを思い出す。そして何も思い出せない夜には、ただ耳を澄まし、蚕が葉を食む音を聞く。冒頭に提示されているのは、まさにそんな、何もかもが尽きた夜である。

この短編を扱った批評は、精神分析的なアプローチをしたものが主流を

成してきた。ニックの語りを、患者が専門医の前で自由連想により語ったものとする解釈もあり。しかし、この作品は自由連想と呼ぶには程遠い注意深さで構成されており、ある問題が巧みに回避されている。あるいは読者に見えにくい形で提示されていると言い換えてもいい。それはヘミングウェイが家庭の問題を扱っているからであり、両親の目をひどく気にしていたからである。そこでニックの一人称語りを前面に出し、あたかも作家ニックの作品であるかのような提示の仕方になっている。“Big Two-Hearted River” (1925) ではニックが作家であることが示唆され、“Fathers and Sons” (1933) では、いい短編になる材料は持っているものの、生きている人々が障害となり書くのを躊躇している作家ニックが描かれている。

この作品のテーマは二つある。ひとつは戦地における神の不在だ。タイトルの “Now I Lay Me” は、就寝前に子供が唱えるよく知られた祈りから取られており、全文を読むとニックの精神状態とのかかわりがよく分かる。

Now I lay me down to sleep  
I pray the Lord my soul to keep.  
If I should die before I wake  
I pray the Lord my soul to take.

ニックは夜、砲弾で吹き飛ばされる体験をし、魂の守護者としての神の不在を意識した<sup>2)</sup>。それゆえ暗闇では眠ることができず、頭のなかで川を思い描き「非常に注意深く」(“very carefully” 363) 釣りをすることで魂をつなぎとめた。このフレーズは2回繰り返される。釣りの合間のランチも「とてもゆっくり」(“very slowly” 363) 食べたとある。“Big Two-Hearted River” でニックが実際におこなう釣りと同質であり、心の平静さを乱す事柄は極力排除される。神の不在を明るい場所での釣りで補

っているのである。

現在のニックは、戦地にいたころを次のように振り返る。

So while now I am fairly sure that it would not really have gone out, yet then, that summer, I was unwilling to make the experiment. (363)

今では戦地でのシェルショックからは立ち直っていることをうかがわせる。魂が出て行ってしまうなどということはなかっただろうと確信している。しかし現在のニックの関心は冒頭に提示された夜にある。鱒釣りも、祈りも思い出せなくなった「あの夜」だ。

それでは冒頭から詳しく見ていきたい。

That night we lay on the floor in the room and I listened to the silkworms eating. The silkworms fed in racks of mulberry leaves and all night you could hear them eating and a dropping sound in the leaves. (363)

“we” とあるのはイタリア人の従卒ジョンがニックの隣にいるからである。普段目を覚ましているのはニックだけだが、この夜はたまたま従卒も寝付けないでいる。「あの夜」はこの作品の締めくくりで従卒とのダイアログとして再度前景化されている。注目したいのは蚕である。蚕については今までいくつかの解釈がなされているが、“dropping sound”については触れられていない<sup>3)</sup>。蚕は葉にしがみつきながら食んでいるわけだが、葉を食べ尽くすとしがみつく対象を失い落下する。落ちてはまた葉に這い上がり、食み、食べ尽くすと落下するという行程を繰り返しているのだろう。これは地獄を想起させる。舞台がイタリアであることを考えると、ダンテの『神曲』を意識していたとも思える。ヘミングウェイは編集者のマ

ックスウェル・パーキンズに“writing on another Italian story”と手紙を送っている（*Selected Letters* 230）。

この作品の結末近くに配されたダイアログの前で、蚕が落ちる音への言及が再びある。

We were lying on blankets spread over straw and when he moved the straw was noisy, but the silkworms were not frightened by any noise we made and ate on steadily. There were the noises of night seven kilometers behind the lines outside but they were different from the small noises inside the room in the dark. (367)

ここで目を引くのは、外から聞こえてくる戦闘の音と室内の蚕が食む音との異質性である。砲弾により魂が抜け出る恐怖を味わったニックが、なぜ室内の音との違いをわざわざ語るのか。それは、現在における関心が屋内に向いているからである。記憶を整理し解釈することで、隠された家庭内の対立が浮かび上がる。これが二つ目のテーマだ。

今までに出会った人々に祈りを捧げるべく記憶を遡ると、ニックが生まれた家の屋根裏部屋に行き着く。そこには梁からぶら下がった両親のウェディング・ケーキのブリキ缶とともに、父親が少年のころ集めたアルコール漬けの蛇の標本などが置かれている。続いて回想されるのは祖父が亡くなったあと、「母親が設計し建てた新しい家」(“a new house designed and built by my mother” 365) に引っ越してからたどった父親の標本の顛末である。「新たな家に持っていかれない多くのものは裏庭で焼かれた」(“Many things that were not to be moved were burned in the backyard...” 365)。そこには父親の標本もあり、熱ではじけた瓶から炎が上がり蛇が焼けたのをニックは鮮明に覚えている<sup>4)</sup>。ここでの回想には現在時制の“remember”が用いられ、戦地にいたときだけでなく、現在

もそのことを思い出すことがあると分かる<sup>5)</sup>。

I remember the snakes burning in the fire in the back yard. But there were no people in that, only things. I could not remember who burned the things even, and I would go on until I came to people and then stop and pray for them. (365)

誰がそれらのものを燃やしたのかは「思い出せなかった」と、ここは過去形で語られている。焚火の場に人はいない。しかし「今」ではおそらく思い出せるのだろう。戦地にいたときには整理できなかった、あるいは抑圧していた記憶から、現在では何らかの答えを導き出せるはずだ。「新たな家には持っていかれない」と判断したのは誰なのか、そして誰が燃やしたのか、その結論を導き出すには十分な材料が用意されている。

それは戦地で回想した新たな家に関する記憶、もうひとつの焚火の場面である。

About the new house I remembered how my mother was always cleaning things out and making good clearance. One time when my father was away on a hunting trip she made a good thorough cleaning out in the basement and burned everything that should not have been there. (365-6)

この場面で真っ先に思い出される人物は母親だ。父親が狩猟旅行に出ているあいだに、「そこにあってはならないもの」を母親が「徹底的に掃除して」燃やしたのである。あってはならないものとは、石斧、石の皮剥ぎナイフ、鋏など父親のコレクションだ。二つの焚火の場面を併置していることから、現在のニックには「屋根裏部屋」にあった父親のコレクションを焼いたのが、母親であったと考えていることが容易に推し量れる。さ

らに留意したいのは、焼かれることを免れた父親のコレクションが、引越しにともない「屋根裏部屋」から「地下室」へと移動していることである。この上下の移動は蚕の「落下する音」と連動している。夜明けを待つあいだ、魂を肉体にとどめておく手立てを全て失ったニックには、蚕が落ちる音が絶えず惨めな父親を思い出す引き金となっていたのである。

父親を出迎える母親の様子は以下のように描かれる。

“I’ve been cleaning out the basement, dear,” my mother said from the porch. She was standing there smiling, to meet him.  
(366)

母親の「微笑み」に悪意はない<sup>6)</sup>。掃除を済ませたことに満足する姿であり、報告を終えるとすぐに家のなかへと入ってしまう。母親が立っていたの対比させるかのように父親は屈みこみ、まだ煙を上げている焚火を「とても注意深く」（“very carefully” 366）かき分ける。このフレーズは二回繰り返され、母親の大掛かりな一掃と対照を成すとともに、父親がいかにネイティブアメリカンの狩猟道具を大切にしていたかをうかがわせる。さらには「とても注意深く」鱒釣りをするニックの姿とも重なる。父親のコレクションは「どれもみな炎に焼かれて黒く焦げ、砕けてしまっていた」（“They had all been blackened and chipped by the fire.” 366）。事物によって人物の内面を描くことに長けたヘミングウェイの文章の好例であり、T. S. エリオットの言う「客観的相関物」に相当する。幼少のニックはこの対照的な両親の姿をどう思ったのだろうか。価値観の相違という大人の理解はもちろんできなかっただろうが、何か考えた形跡は認められる。父親から猟銃と二つの獲物バッグを家のなかに運ぶよう言付かったニックは、父親が家に入ったあとも裏庭に残る。そして「しばらくしてから」（“After a while” 366）バッグを運び込む。子供の感覚で「しばらく」考えたことを、現在のニックは記憶を再構築し、新たな意味づけをおこな

ったとみてよいだろう。父を貶める母。それに抵抗しない父の不甲斐なさ。ニックが記憶する父親の教えは以下の通りである。

“Take them one at a time,” my father said. “Don’t try and carry too much at once.” (366)

先に触れた猟銃と二つの獲物バッグを運ぶことに対する注意である。怒りをあらわにするのではなく「一度にひとつずつ」という着実性がニックの記憶に残っている。雑音に頓着することなく着実に食べ続け落下する蚕と重なる姿だ。その蚕について「おかしなものだ」(“It’s funny” 368) と戦地のニックは感想を述べている。蚕はやがて蛹になり繭にくるまれるのだが、熱湯につけられ糸を取られる運命にある。記憶の整理ができ、事の次第を理解した現在のニックにとっては、“funny”という言葉は滑稽にも響くだろう。

ニックはかつて知り合った人々全てに「主の祈り」(“Our Father”) と「聖母マリアへの祈り」(“Hail Mary”) を捧げたと述懐する。しかし実際に語られている場面に登場する人物は、両親の二人だけである。「主の祈り」および「聖母マリア」の選択は、それぞれそこに父、母が登場することと無関係ではない。そして“Our Father”に関しては、“On earth as it is in heaven” より先はどうしても思い出せなかったとニックは語る。その先には何があるのか。

Give us this day our daily bread.  
And forgive us our trespasses,  
As we forgive those who trespass against us.  
And lead us not into temptation,  
But deliver us from evil.  
Amen. (*Matt* 6: 12)

1行目の「日々の糧」に関しては、父親がそれを提供する像をニックが思い描けなかったのだとする解釈がある（Phelan 57）。ヘミングウェイ家に即して言えば、声楽の個人レッスンをおこなっていた母親の収入が開業医の父の収入を上回っていたことは事実である<sup>7)</sup>。2行目の“our trespasses”はどうか。通常は宗教上の「あやまち」を意味するが、二つの焚火の場面を考え合わせれば、父の世界、すなわち狩猟という男性文化への母の「侵入」と読めるだろう。赦されるべき対象が一人称複数になっているのは、ニックに負い目があるからだ。ケネディ・ライブラリーにある草稿には、一掃する母親の手伝いをニックもしていたことが記されている。しかもニックの名と並んでErnestの愛称“Ernie”も用いられていた（Smith 173）。4行目の「誘惑」は創世記のアダムとイヴを想起させる。ニック・アダムズ創造の起源をたどると、行き着く先には両親のウェディング・ケーキのブリキ缶があった。ニックの起源は両親の対立の起源でもある。このような文脈に置いて「主の祈り」を読めば、5行目の「悪から救いたまえ」の「悪」とは結婚を指し示すことになる。見えてくるのは「結婚回避」の祈りなのである。

冒頭で「あの夜」と語り始められた夜は、結末近くで「…そしてその夜、わたしは蚕の音に耳を澄ませていた」（“... and on this night I listened to the silkworms.” 367）と再び結び付けられ、読者をジョンとのダイアログに導く。ジョンはアメリカに10年住んだのち、1914年にイタリアに帰国した際徴兵され、英語ができるためニックの従卒となった。妻と3人の娘がシカゴにいて、度々手紙が来る。ジョンはニックと違って目を覚ましたまま横になっているのに慣れておらず、じっとしていることができない。ニックは自分も起きていることを相手に知らせるため、わざと姿勢を変える。それに気づいたジョンは「眠れないんですか、中尉殿」（“Can't you sleep, Signor Tenente?” 367）と声を掛けてくる。話をしたかったのはニックである点に注意する必要がある。両者眠れないことを確



認しあったあと、ニックは「少し話をしようか」（“You want to talk a while?” 368）と相手に付き合う形をよそおい話を始める。以下ニックの質問とジョンの受け答えである。

“Tell me about out in Chicago,” I said.

“Oh,” he said, “I told you all that once.”

“Tell me about how you got married.”

“I told you that.”

“Was the letter you got Monday—from her?”

“Sure. She writes me all the time. She’s making good money with the place.” (368)

まずはシカゴについて訊く。ジョンは以前にもそれについては話したと答えている。ニックはシカゴにジョンの家族がいることを知っているのだ。ニックの関心は明らかに「結婚」に向けられている。このダイアローグを提示しているのは、語り手である現在のニックである点を考え合わせれば、「結婚」は戦地での関心であったのと同時に、記憶が整理され意味づけされた現在の関心でもあると推察できる。

このダイアローグの部分は、不眠のこと、戦争のこと、ニックがこれから就こうとしている仕事のことなどにかなりのスペースが割かれているが、締めくくりではまた結婚に話題が帰着する。ジョンは結婚すれば心配事はなくなると、ニックに結婚を強く勧める。そして以下のように主張する。

“A man ought to be married. You’ll never regret it. Every man ought to be married.”

“All right,” I said. “Let’s try and sleep a while.” (370)

“You want to talk a while?” と誘ったニックだが、「男は結婚しなく

てはならない」、「後悔することはない」と畳み掛けられると「少し寝てみることにしよう」と会話を切り上げにかかる。その後ジョンはすぐに規則正しい寝息を立て始め、やがて鼾をかく。自ら「神経質だ」と言っていたのとは逆の姿だ。ニックは蚕が葉に落ちる音に耳を澄ませ、今までに知り合った女の子がどんな妻になるかを想像する。それは最初のうちはとても興味深く、鱒釣りも祈りも必要でなかったが、やがてまた鱒釣りに戻っていく。鱒釣りと女の子たちを思い浮かべることの違いは次のように語られる。

Finally, though, I went back to trout fishing, because I found that I could remember all the streams and there was always something new about them, while the girls, after I had thought about them a few times, blurred and I could not call them into my mind and finally they all blurred and all became rather the same and I gave up thinking about them almost altogether.  
(371)

鱒釣りには「いつも何か新しいことがあった」、それゆえ朝までの時間魂を体にとどめておくのに有効だった。しかし女の子の方は「みんなぼやけてしまい、みんな似たようなもの」になった。朝までの時間を潰せないというだけのことではない。戦地では「みんな似たようなもの」と、おぼろげにしか分かっていなかったものが、現在では鮮明な像として脳裏に浮かぶのではないだろうか。ポーチに立ち、微笑む母の姿だ。「あの夜」から数ヶ月経ったあとミラノの病院に見舞いに來たジョンは、ニックがまだ結婚していないことを知り、とてもがっかりしたと語られる。そしてこの物語を語っている現在のニックもいまだ結婚していない。戦争での傷からは回復したニックではあるが、「結婚」には踏み出すことができない。その原因を遡ると現われるのが、対立する両親の結婚生活なのである。

“Now I Lay Me”のニックは結婚していないが、“Cross-Country Snow”（1925）ではHelenという女性とのあいだにニックの子どもが生まれることが知らされる。そして“Fathers and Sons”ではニックは父親になっており、幼少の息子に狼のこゝと、父親のことを話して聞かせる。そこに母親は登場しない。しかし、ヘミングウェイは母の畏にかかった父親の姿を“Fathers and Sons”では象徴的に描いている。

#### 注

- 1) 精神分析的アプローチはPhilip Youngから始まり（20）、多くの研究者がそれに追随した。フロイトの自由連想との類似性を指摘したのはRichard Hoveyである（181）。
- 2) ニックが最も早い段階で死を意識したのは幼少期であり、“Indian Camp”（1925）の草稿にその姿が見られる。教会で“Some day the silver cord will break.”という賛美歌の一節を聞いてから数週間後の夜、寝ようとしていたニックは、自分もいつかは死ぬのだという恐怖に襲われる（*The Nick Adams Stories* 14）。
- 3) Kenneth Johnsonは、ニックの成長過程と蚕のライフサイクルとの類似性を主張する（7-9）。James Phelanは、蚕が桑の葉をどんどん食べていくように何かがニックを蝕んでいくと述べている（49）。
- 4) Hoveyをはじめ、アルコール漬けの蛇を男性性の象徴とする解釈がある（185）。
- 5) この現在時制についてはScott MacDonaldが既に指摘しているが、“That night”を他の夜と区別していない。
- 6) Kenneth Lynnは妻の微笑みに「勝利の証」を見る（48）。
- 7) 母グレイスの収入は月額だけでも1000ドル、父クラレンスは年収2000ドルだった（Reynolds 106）。

#### 参考文献

- Hemingway, Ernest. *Ernest Hemingway: Selected Letters, 1917-1961*. Ed. Carlos Baker. New York: Scribner's, 1981.
- . *The Nick Adams Stories*. Ed. Philip Young. New York: Scribner's, 1972.
- . *The Short Stories of Ernest Hemingway*. New York: Scribner's, 1966.
- Hovey, Richard B. “Hemingway's ‘Now I Lay Me’: A Psychological

- Interpretation." *Literature and Psychology* 15 (1965) : 70-78 ; rpt. In *The Short Stories of Ernest Hemingway : Critical Essays*. Ed. Jackson J. Benson. Durham: Duke UP, 1975, 180-87.
- Johnson, Kenneth G. "The Great Awakening : Nick Adams and the Silkworms in 'Now I Lay Me.'" *Hemingway Notes* 1 (1971) : 7-9.
- Lynn, Kenneth S. *Hemingway*. London: Simon and Schuster, 1987.
- MacDonald, Scott. "Implications of Narrative Perspective in Hemingway's 'Now I Lay Me.'" *Studies in American Fiction* (1976) : 213-20.
- Phelan, James. "'Now I Lay Me' : Nick's Strange Monologue, Hemingway's Powerful Lyric, and the Reader's Disconcerting Experience." *New Essays on Hemingway's Short Fiction*. Ed. Paul Smith. Cambridge: Cambridge UP, 1998, 47-72.
- Reynolds, Michael. *The Young Hemingway*. New York: Basil Blackwell, 1986.
- Smith, Paul. *A Reader's Guide to the Short Stories of Ernest Hemingway*. Boston: G. K. Hall, 1989.
- Young, Philip. *Ernest Hemingway : A Reconsideration*. University Park: The Pennsylvania State UP, 1966.

（英米文学科 非常勤講師）